

## 赴任した頃の景観 断想

春日茂男

近年の大阪市大の公報などに載っている杉本キャンパスの写真を拝見すると、ほとんど建物で埋まってきた感じで、建物のまわりの樹木も成長して、その充実ぶりがうかがえる。かつて私が市大へ赴任した頃の景観を思い合わせると、今昔の感があるというも過言ではない。当時は10年余りに及ぶ米軍接収が解除されて、数年経っていたが、少し以前までは正門前の道路には米軍の検問所があったと聞く。軍隊のバラックも撤去され、学園として再開されたところであった。建物の修復、化粧直しもとりあえずおこなわれたようであったが、それらはおおむね旧商科大学時代のものであった。木陰をなす樹木に乏しくシンボリックな時計台の建物が四角四面に見える。

この本館の建物の西隣に、私の就任の年に、今日の文学部棟になっている建物が、恐らく戦後はじめてできた。当初は現在の2/3の長さであって、これを商経文の三学部と経済研究所の研究室に割当てるといふのだから、調整はなかなか大変だったと思う。この中で11専攻をもつ文学部、その中の一専攻に果たしてどれだけのスペースが与えられるのか、ということになると大きな期待はできなかった。地理学教室には結果として4階に5室が割りあてられた。偶然であろうが、この数は専攻の専門教員の定数に準ずるものであった。地理学教室としては教員研究室に3、図書室に1、演習室に1をあて、狭いながらこれで発足した。その後この状態は、増築や増棟がおこなわれたにも拘わらず、それに応じて余り変わらなかったのが不思議であった。

上記の地理学の演習、講義室にあてた部屋もサイズは個人研究室であるが、多目的に利用された。伝言板サイズの小黒板を掛けて授業に間に合わせた。小さい黒板なので板書のたびにバタバタと音を立て、何回も消しては書くうちに、狭い部屋はチョークの粉だらけになった。椅子も不足していたので、椅子はそのあたりの部屋を往き来していた。

教員研究室の方も、当初は机と椅子が二人分人っただけで、まだ書架もなかったので床が空いていた。そこで私は学生の少ないときこの床を黒板がわりに使って、略図を書いたりした。小黒板よりも存分書けるといふものである。

地理学教室につきものの実習室はどうなっていたのかというと、教養地区の一隅のカマボコ兵舎と称する平屋の建物の一室に実習机がおかれていた。他の部分は大抵学生の部屋などに使われていた。この実習室が実際どれ位授業に使われたかは知らないが、間もなくこの米軍の置きみやげのような建物はとりこわされた。しばらく実習室は宙に浮いた形となったが、その後研究棟の方に0.5室が配分になり、社会学教室と共同の部屋で、しばらくここに、実習机を入れていた。

専門の授業には、本館の中の小部屋も使ったが、この建物は天井が高いが窓が少なく、うす暗かった。いまひとつ、本館の東側、図書館の南に木造2階建ての建物があり、小部屋が多かったので、各学部のゼミに使われていたが、地理学専門の授業でも、しばしばここを使用した。もともとは経済研究所であったと聞いていたが、相当にいたみがひどく、下駄履きの学生が廊下をガタンゴトンいわせて歩いていたのを思い出す。この建物もほどなくとりこわされた。

現在の工学部、生活科学部の区域は、かつて米軍の兵舎があったらしいが、それが撤去されて空地になっていた。しかし単なる空地というより一時期、これも米軍がもたらしたといわれるセイタカア

ワダチソウの群生するところとなり、丈余の高さに密生して、冬季にも倒れることはなかった。この中に対角線状に人がひとり通れる程度のふみ分け道ができており、阪和線杉本町駅の北の踏切をこえて、この細道をたどると、正門近くまで到達することができるという利点があったので、よく利用させてもらった。というのは気分的に杉本町駅の南の踏切を渡るのは遠廻りをさせられるように思われたからである。しかしこの群落もやがてすぐ除去されて、工学部の学舎用地に整地された。

杉本学舎に米軍接収の名残はほとんどなくなったとはいえ、本館の北西の、木造の旧チャペルの建物は永く存続していた。それよりも当初キャンパスの周囲をかこむ外構は、米軍キャンプによくみかけたもので、パイプのフレームに斜格子の金網張りであって、正門の扉もまたこれに準ずる簡略なものであった。この外構に接して多分戦前からのものであろう樹木、主にカイヅカイブキのたぐい、が植えられていた。正門から玄関に至る空間に今日亭々と並ぶワシントンヤシも当時はそれと気付かぬほど低いものであった。

最後に、市大への足の便であるが、当時からほとんど変わっていない。阪和線杉本町駅は各駅停車の電車しか停まらないが、他の大学に比べて決して不便とはいえない。しかしこの駅は西にしか改札口がないので、キャンパスを目の前にして踏切へ廻らねばならない。当時から東出口の要望があったが、いまだに実現していない。当時のことで想い出されるのはかつての私鉄時代の個性的な車両が残っていて、しばらくそれに乗せてもらったことである。ある面でのんびりした景観であった。市営地下鉄が「あびこ」まで延長されたのもこの頃であった。この駅のロケーションは市大へのアクセスは考慮されなかったようだが、地下鉄の車両基地が市大教養地区に隣接して設けられたのが皮肉であった。

以上分かり切ったようなことをとりとめもなく綴ったが、私にとっては市大ではじめて体験した景観であって、その後の景観変遷の過程よりも印象深いものがある。当初は全体として良い意味で素朴な世の中であった。

(旧教員)